

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので、送付します。

◇
発生予察特殊報第 1 号

病虫害名 トマト茎えそ病 (仮称)
病原ウイルス キク茎えそウイルス
(Chrysanthemum stem necrosis virus : CSNV)
発生作物 トマト
発生地域 府南部地域

1 発生経過

平成 27 年 5 月、京都府南部地域の露地栽培トマトにおいて、茎及び葉にえそ、葉の退緑などの症状を呈する株が認められた。

RT-PCR 法によるウイルス検定を行った結果、Chrysanthemum stem necrosis virus (CSNV) が検出され、CSNVによるトマト茎えそ病 (仮称) と確認された。

本ウイルスによるトマト茎えそ病 (仮称) の国内での発生は、平成 20 年に群馬県で初めて確認されて以来、9 都県から報告されているが、京都府では初めての確認である。

2 病 徴

葉にえそ症状 (写真 2) や退緑、茎にえそ症状 (写真 3)、果実では着色不良やえそ、変形を生じ、株の生長点付近ではえそ、萎縮、褐変を生じる (写真 1 及び 4)。

これらの症状は、トマト黄化えそウイルス (TSWV) による病徴と酷似する。

3 感染植物

キク、トマト、ピーマン、アスター、トルコギキョウ等への感染が報告されている。

4 伝染方法

本病原ウイルスは、トマト黄化えそウイルス (TSWV) やアイリス黄斑ウイルス (IYSV) と同じトスポウイルス属に属し、ミカンキイロアザミウマによって媒介される。

ミカンキイロアザミウマの 1 齢幼虫が本病原ウイルス (CSNV) に感染した植物を吸汁することによりウイルスを獲得し、成虫となってから永続的にウイルスを伝搬する。

なお、ウイルスを獲得した成虫から卵を通じた次世代への伝搬 (経卵伝染) はしない。

また、種子伝染や土壌伝染、管理作業時にハサミや手指等に付着した汁液を介しての伝染 (汁液伝染) はしないと考えられている。

ミカンキイロアザミウマ

元来北米に広く分布し、花き類の重要害虫として知られていたが、日本には平成2年に関東で初めて確認された後、花き類、野菜類を中心に全国各地に分布が拡大している。京都府では平成7年に発生が確認されている。

体長は雌成虫が1.5～1.7mm、雄成虫が1.0～1.2mmで、体色は雌成虫が淡黄色～褐色、雄成虫が淡黄色の微小な昆虫で、特に花を好む性質が強い。

本種の寄主範囲は広く、50科200種以上が記録されており、ハウスミカンやモモ等の果樹にも被害を及ぼす。

また、本病原ウイルス（CSNV）だけでなく、トマト黄化えそウイルス（TSWV）、インパチェンスえそ斑点ウイルス（INSV）を媒介する。

5 防除対策

(1) 発病株は二次伝染源となるので、抜き取って土中に埋めるなど速やかに処分する。

(2) 媒介虫であるミカンキイロアザミウマの防除を徹底する。

施設栽培では、開口部に白色または銀色の防虫ネット（0.4mm目合い以下）を展張し、施設外からの侵入を防ぐ。

(3) 薬剤防除に当たっては効果の確認に努め、感受性低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する（表1、2）。

薬剤散布に当たっては、登録内容を十分に確認する。

(4) 収穫後の残さや雑草はミカンキイロアザミウマの生息・増殖場所となるので、除草や残さ処理を徹底する。

(5) 施設では、栽培終了後に施設を密閉して蒸し込み、残存する虫の死滅を図る。



写真1 発病株の様子



写真2 葉でのえそ症状



写真3 茎でのえそ症状



写真4 生長点付近の症状

表1 「トマト」のミカンキロアザミウマ及びアザミウマ類に登録のある薬剤

系統名	薬剤名	適用害虫名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数	散布液量
合成ピレスロイド系	アーデント水和剤	ミカンキロアザミウマ	1,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	150～300リットル/10a
	アザミバスター水和剤						
ネオニコチノイド系	ベストガード水溶剤	アザミウマ類	1,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
	モスピラン水溶剤	アザミウマ類	2,000倍	散布	収穫前日まで		
	モスピラン顆粒水溶剤	アザミウマ類	2,000倍	散布	収穫前日まで		
	モスピランジェット	ミカンキロアザミウマ	くん煙室容積 400m ³ (床面積200m ² × 高さ2m)当たり50g	くん煙	収穫前日まで	—	
マクロライド系	アニキ乳剤	ミカンキロアザミウマ	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
スピノシン系	スピノエース顆粒水和剤	アザミウマ類	5,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
	ディアナSC	アザミウマ類	2,500倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
IGR剤	マッチ乳剤	ミカンキロアザミウマ	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで	4回以内	100～300リットル/10a
	カスケード乳剤	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	4回以内	100～300リットル/10a
	カウンター乳剤	アザミウマ類	2,000倍	散布	1番花の開花まで	4回以内	100～300リットル/10a
ピリジカルボキシアミド系	ウララDF	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
呼吸酸素阻害系	コテツフロアブル	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
トルフェンピラド系	ハチハチ乳剤	アザミウマ類	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
	ハチハチフロアブル	アザミウマ類	1,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
環状ケトエノール系	モベントフロアブル	アザミウマ類	1,000倍	灌注	育苗期後半	1回	50ml/株
			2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内 (灌注は 1回のみ)	100～300リットル/10a
合成ピレスロイド系 + 環状ケトエノール系	クリアオール水和剤	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
気門封鎖剤 + 抗生物質	デュアルサイド水和剤	アザミウマ類	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
抗生物質	ポリオキシンAL水溶剤「科研」	アザミウマ類	5000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	100～300リットル/10a
ジアミド系	ブリロッソ粒剤	アザミウマ類	2g/株	株元散布	育苗期後半～ 定植時	1回	—

表2 「野菜類」のアザミウマ類に登録のある薬剤

系統名	薬剤名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数	備考	
天敵昆虫	アリガタシマアザミウマ剤	アリガタ 500～2,000ml/10a (約500～2,000頭/10a)	放飼	発生初期	—	施設栽培	
	ククメリスカブリダニ剤	ククメリス	50～100頭/株	放飼	発生初期	—	施設栽培
		メリトツブ	100頭/株				
	スワルスキーカブリダニ剤	スワルスキー	250～500ml/10a (約25,000～50,000頭/10a)	放飼	発生直前～発生初期	—	施設栽培
		スワルスキープラス	100～200パック/10a (約25,000～50,000頭/10a)				
	タイリクヒメハナカメムシ剤	オリスターA、 タイリク、 トスバック	500～2,000ml/10a (約500～2,000頭/10a)	放飼	発生初期	—	施設栽培
リクトツブ		1,000～3,000頭/10a					
天敵微生物	ポーベリア バシアーナ水和剤	ポタニガード水和剤	散布	発生初期	—	施設栽培	
	ポーベリア バシアーナ乳剤	ポタニガードES					

※ 各薬剤の登録内容は平成27年6月1日現在のものである。

農薬の使用に当たっては、最新の使用方法や注意事項等を必ず確認すること。